

ライフコース選択による母親の育児負担感

－ 育児負担感の内容に着目して －

野 口 裕 代

問題・目的

近年、親による虐待が後を絶たず、幼い子どもが虐待によって命を落とす事件が頻発し、テレビや新聞で大きく取り上げられている。厚生労働省（2015）によると、平成26年度の児童相談所に寄せられた児童虐待の相談対応件数は、児童虐待防止法施行前（平成11年度）の7.6倍の88,931件となっており、実際に子どもに虐待を加える虐待者は、実母が52.4%と最も多く、虐待を受けた子どもは、小学校入学前の子どもの合計が43.5%となっており、高い割合を占めている。

厚生労働省（2007）によると、虐待発生のリスク要因は明らかにされてきており、それには、保護者側のリスク要因、子ども側のリスク要因、養育環境のリスク要因が挙げられる。その中の保護者側のリスク要因には、妊娠、出産、育児を通して発生するものと、保護者自身の性格や精神疾患等の身体的・精神的に不健康な状態から起因するものがあるといわれている。

今日まで、育児に関する研究は様々な視点から多数行われてきている。母親が育児に関して感じる疲労感、育児意欲の低下、育児困難感・不安として捉える立場で研究を行っている牧野（1982）は、育児不安を、育児行為の中で一時的に生じる疑問や心配ではなく、持続し、蓄積された不安の状態を問題にし、「子どもの現状や将来、あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」としている。

岩上（2011）は、ライフコースとは、「個人がたどる、生涯にわたる各種役割経歴の束としての軌跡」といえると述べている。一昔前に比べ、女性の選択することのできるライフコースは格段に増えており、女性の意識や生活の変化が大きく、出産後も仕事を続ける女性も増え、多くの女性が「子育てだけで人生を終わりたいくない」というような考えを持っている。自分のために生きるということと、子どものために母親として生きるということ自体が、そもそも対立する面を持ち、葛藤

をはらんでいるのである（武内，1994）。原口ら（2005）も、今日の母親たちは「子育てをしたい」と同時に「自分の生き方を大切にしたい」という葛藤が生じる傾向が高いことを指摘しており、その結果、育児を肯定的に捉えることを困難にさせ、育児不安などのネガティブな感情を喚起する要因となっていることを示唆している。

ライフコースと育児不安、育児負担感について研究している宮本は、ライフコースと育児不安の関連で、育児不安の程度は、現在のライフコースとの関連があるというよりも、望んだライフコースがとれたかどうかということに関連しているのではないかと指摘している（宮本，2007）。そして、宮本（2013）において、育児負担感尺度を作成し、育児負担感の程度は、望んだライフコースがとれたかどうかではなく、ライフコース決定の文脈に納得できているか否かが影響していることを示唆している。

ライフコースと育児負担感の高低との関連については、いくつかの研究がなされてきているが、育児負担感の高い母親に焦点を当て、希望していたライフコースをとることができたか否かによって、育児負担感の内容に違いがあるかまでは検討されていない。そこで本研究では、育児負担感が高い母親が実際に語る育児負担感の内容に着目し、希望していたライフコースをとることができたか、できなかったか等、ライフコースやそれ以外の要因との関係によって、育児負担感の内容が異なるかを検討していく。

質問紙調査

目的 乳幼児期の子どもをもつ母親が、育児に対してどれ程負担を感じているか、宮本（2013）と比較しながら検討する。

方法 研究協力者は、A市内にある認定こども園及び、同園に附属する地域子育て支援センターに通う母親。「就業継続型」「再就職型」「専業主婦型」「再就職希望型」の4パターンから、現在のライフコースと過去に希望していたライフコー

スを1つずつ選択してもらった。そして、宮本(2013)の育児負担感尺度、「閉塞感・犠牲感」、「疲労感」、「自信のなさ」、「離反願望」の4因子からなる計17項目に、「全くあてはまらない」～「とてもあてはまる」の4件法で回答してもらった。質問紙は、認定こども園においては、担任の先生方に配布していただき、地域子育て支援センターにおいては、研究者が直接配布した。

結果 217名に質問紙を配布し、回収することのできた131名を対象に分析を行った(回収率60.36%)。研究協力者の平均年齢は36.3歳($SD=4.54$)で、育児負担感尺度の平均得点は41.06点($SD=7.12$)であった。そして、宮本(2013)と同じ因子構造になっているか確認するために、因子分析を行った。その結果、4因子が抽出され、累積寄与率は66.84%であり、因子負荷量の低かった一部の項目を除き、宮本(2013)と同じ因子構造になっていることが確認された。また、ライフコースの一致、不一致によって、育児負担感そのものと、育児負担感を構成する4つの因子に差があるかを見るために、t検定を行った。その結果、それらの間に有意な差は見られなかった。

面接調査

目的 乳幼児期の子どもをもつ、育児負担感の高い母親が、希望していたライフコースをとることができているか、希望していたライフコースをとることができていないかによって、育児負担感の内容が異なるかについて、質的に検討する。

方法 質問紙調査において育児負担感が平均より高く、希望していたライフコースをとることができている、インタビュー調査に協力可能な母親2名と、質問紙調査において育児負担感が平均より高く、希望していたライフコースをとることができていない、インタビュー調査に協力可能な母親3名。半構造化面接で、研究者と研究協力者が面接を行っている間、子ども発達臨床センター内にて、他の学生が研究協力者の子どもを託児する形で行った。質問項目は、「育児とはどのようなものか(普段感じていることやイメージ)」、「どのような経緯で、現在のライフコースをとっているのか」、「どのような理由で、過去、そのライフコースを希望していたのか」、「子育てをしていて、どのような時にどのような楽しさを感じるか」、「子育てをしていて、どのような時にどのような

大変さを感じるか」などを設定した。

結果 5人の語りに対し、KJ法をもとにした分析を行った。その結果、希望したライフコースと実際のライフコースが、一致しているか一致していないかによって、育児負担感の高い母親の、育児負担感の内容に違いがあるとはいえなかった。

考察

質問紙調査の結果、希望していたライフコースと実際にとっているライフコースが、一致しているかどうかによって、育児負担感尺度の得点と下位尺度得点に有意な差は見られなかった。つまり、希望しているライフコースと実際のライフコースが、一致していても一致していなくても、育児負担感の高低には影響せず、育児負担感の内容にも違いがあるとは言えず、宮本(2013)の結果を支持することとなった。

面接調査の結果、希望していたライフコースと実際のライフコースが、一致していない母親たち全員に、ライフコース選択の際の葛藤が見られたが、その葛藤が見られたからといって、育児負担感の内容まで共通しないこと、一致している母親たちにも、ライフコース選択の際に葛藤があることと、育児負担感の内容が共通しないことが分かった。そして、それぞれの語りの中で、いくつか共通するところもあった。1つ目は、子どもが自分の思う通りに動いてくれないという点で、育児の大変さを感じているところが共通していた。2つ目は、育児をしていると、子どもと離れて1人の時間を過ごすことが難しいという点で、一時預かりなどのサポートを求めているところが共通していた。3つ目は、研究協力者の5名中4名が、夫からのサポートを得ることができていない点で、母子家庭のような状態で生活しているところが共通していた。

臨床心理学的意義

本研究において、育児負担感の高い母親たちは、1人の時間を持つことが難しいということが分かり、一時預かりなど、子どもを預けられるようなサポートを求めていることが明らかとなった。これは、子育て支援を社会全体で考えていく必要のある現在、社会に訴えていく際の根拠になり得るのではないだろうか。そして、夫からのサポートも受けられていない状況が明らかになったことも、世の夫や、男性の働き方について社会として取り組んでいくきっかけになるのではないか。